中国・茶馬古道

39

ジャーナリスト 篠田香子

“南のシルクロード”とも呼ばれたお茶の交易路 再び関心を集めるヒマラヤ山脈のキャラバン・ロードへ 1,000年以上の歴史と文化のドラマ

雲南省などの茶の産地からチベットの山岳を抜けラサへと続いた10世紀からの交易路。近年、その数千kmに及ぶ山道が少しづつ再開され、文化的価値が見直されている。かつて、数か月かけて馬と人が歩んだ道の一部を、シャングリラを起点にフランス人の率いる古きよきヨーロピアン・スタイルのキャラバンで数日かけて辿った。

険しい山道をゆくキャラバン

峰を望む標高3,500mのキャンプ地

標 高5000mの峠を越える 全長2000km余りの古道。シャングリラなどの村が点在

茶馬古道は、中国の茶の産地から西のミャンマー、南のラオスなどに抜けるいくつかのルートがあるが、雲南省普洱から北へチベットの山越えをするルートが、景観や文化でも最も変化に富んでいる。ちなみに、普洱からラサまでは5000m級の峠を4つ越えるほか、揚子江やメコン川、渓谷や土漠を越える2000km余りの道だ。険しい地形と厳しい天候のなかを、主に茶を運び（南のシルクロードと呼ばれながらも絹は含まれなかった）、帰途はチベット産の馬や薬などが荷となった。この極端な気候の変化に普洱茶が発酵し、より風味の強いものになったという。

この古道の起源は10世紀に遡り、中国の皇帝はチベットの王室に貴重な茶を提供した。代わりに、中国にはチベットの薬、そして戦闘能力に優れたチベット馬が届けられた。1661年にはダライ・ラマの要請で、雲南の麗江近郊に馬と茶の市場が開かれ、大いに栄えることとなる。ユニークな生活風習や文化をもつ少数民族の地を抜ける古道は、多様な文化交流も生み出した。また、チベットと中国を往復するラマ僧たちも、このキャラバン隊としばしば旅をともにした。しかし、1911年の中華人民共和国の設立とともに、交易路としての古道は廃れてしまう。第二次大戦時の裏ルートとして軍事物資を運ぶ役割を担った時期を除いて。

中国政府の関心はなくなったものの、このヒマラヤ奥地はヨーロッパの探検家の関心を集め

た。1920年から30年にかけてこの地を旅した、オーストリア人の植物学者ジョセフ・ロック氏が『ナショナル・ジオグラフィック誌』に記した旅行記は、多くの探検家を駆り立てることになる。シャングリラを書いたジェームズ・ヒルトン氏（本人はこの一帯を訪ねたことはない）による小説『失われた地平線』も、この記事から発想を得たとされている。当時はこのような地を訪ねるのは、旅というよりも探検であった。

山岳の自然環境は厳しく、チベットと中国などの小競り合い、また、山賊などの危険性も高かった。それにもかかわらず、多くのヨーロッパの探検家は、大がかりなキャラバンを従えた優雅なコロニアル・スタイルの旅をした。ロックはキャラバンで銀器や陶器の食器、浴槽まで運ぶという徹底ぶりであったという。ロックのテントに招かれた部族長やチベット王族に、西欧文化を印象づけることになったようだ。こうして続いていた、欧米人探検家の旅も文革とともに終わりを迎える。

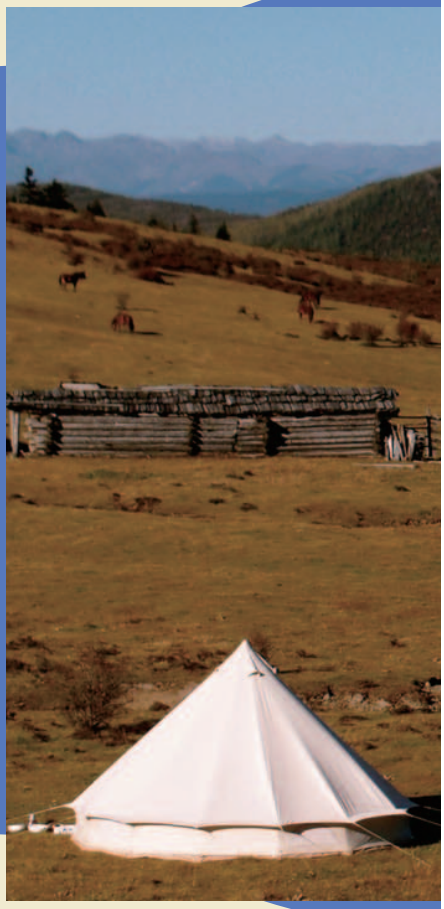
茶馬古道は半世紀にわたり、すっかり忘れ去られる存在になっていた。馬を連ねて（病気や怪我でない限り、人も荷を担いで歩いた）進んだ山道や無数の橋の多くは自然のなかで風化し、断片的に残っているだけだ。だが、茶馬古道の道中の村は、キャラバン隊の記憶をとどめている。雲南省チベット自治州のシャングリラも、かつては茶馬古道の要衝の村であった。この理想郷と称される街は、年

細い橋を渡るキャラバン隊

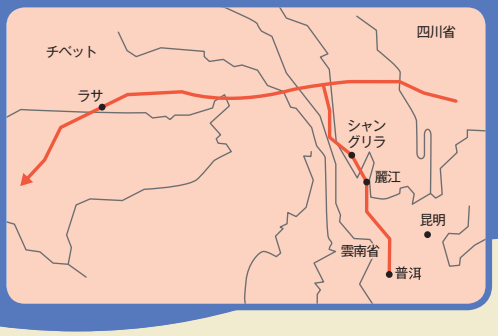
朝食テントで朝日を仰ぐ

ゆったりと快適なテント

一本道はわかりやすく迷うことは少ない



茶馬古道 MAP



間400万人が訪れる観光地となったが、村人のなかにはキャラバン隊が訪ねた時代を覚えている村人も。父や祖父がキャラバン交易をしていたという人もいる。

優雅なる「グランピング」フランス人率いるヨーロピアン・スタイルのキャラバン

そのシャングリラを起点に、2年前からフランス人チームが茶馬古道の一部を辿るキャラバンツアーを催行している。探検家のロックのように、多くの馬を連ねてフレンチ・ウインを携え、コロニアルなスタイルのキャンプを張りながら。基本のコースはシャングリラの西22km、リンガ寺で知られるダボシ（標高3200m）の村からチベット自治州北部を5日間で約75kmを歩く。途中2つの4000m級の峠をハイライトに、渓谷、川、草原を越える。テント、食料などを担ぐ馬のキャラバンとともに。

ツアーの名前は「キャラバン・ロイタード」。1940年にこの山岳で山賊に殺された、孤高のフランス人探検家の名前をとったもの。主催するコンスタンチン・デ・スリゼウィック氏は、「標高6000mのコラコム山、大草原と自然の絶景とチベットと少数民族の文化などが織り成す独特の風土を歩くことで、五感で茶馬古道を体験できるはず。行程はハードだが、ロイタードのような治安面の心配はない。ヴィクトリア時代のキャラバンの優雅なスタイルを再現することに心がけた」と、語る。

ベル・テントと呼ばれる英国製の大型テントは、南北戦争時の上官らのために開発されたもので、頑丈さと機能美で知られている。夜

間には絨毯を敷き詰め、銀の燭台の蝋燭が点り、銀器とクリスタルの並ぶテーブルが用意される。料理はフレンチ風、ワインとフランスパンも。夜にはシーツを整えたベッド、読書ランプ、暖房機が快適な空間に。ロマンチックな演出がされた内装は、カップルにも好評だ。

欧米ではワイルドな環境で、快適なキャンプを設置する、大人のための「グランピング」（魅力的という意味のグラマラスとキャンピングの造語）が人気を集めている。アフリカの高級サファリでは昔からあったスタイルだが、大自然を舞台に世界的に広がっている。スリゼウィック氏のキャラバンは、ヴィクトリア時代をテーマに、そのころのアンティークを集めて使用しているのが、欧米客には喜ばれるらしい。

「ロックのように浴槽や図書室、ドン・ペリニヨンを運ぶまでに至りませんが……キャラバンでの食事は大きな楽しみ。食材や盛り付けはもちろん、アフタヌーンティーの休憩、夕陽を眺めながら食前のアペリティフ、キャンプファイヤーを囲んでの食後のデザートなどを工夫している」（スリゼウィック氏）。

キャラバンは2人から催行、現在に至るまで参加者の最年少は7歳、最高齢は75歳。乗馬用の馬を連れていくことで、疲れた際にはそれに乗ることができるが、基本的には歩いて進む。キャラバンには主催者2、3人に加え、通常20頭の馬とほぼ同じ人数が随行する大部隊となる。この部隊もコースの整備、野営地などもすべて地元との協力によるもの。

「村長らとの相談で近隣の5つの村から均等にスタッフを雇うようにしている。村人はそれで馬の数をふやすこともできる。チベット人は忍耐強く真面目な人々で、信頼関係を築きながら仕事ができるのはありがたい。地元の生活水準を上げることに貢献しながら、地元の人々と共に自然環境の保全に力を入れてゆきたい」（スリゼウィック氏）。

キャラバンのほかにも、ダボシ近辺の山麓で移動のないテント2泊の滞在アレンジも行なっている。キャラバン、テントともに気温が零下になる11月下旬から3月の冬季は休業する。

右端がスリゼウィック氏。主催者らは十字軍に遡るフランス名家の子息だ

ホテルのような朝食セット

キャラバン詳細:
http://www.caravane-liotard.com/

Ancient tea Horse Road

標高4,000mの湖

お洒落な衣装のチベット人

ヤクの親子が遊ぶ

茶 馬古道、旅の無事を願う寺の麓に佇む バンヤンツリー・リンガー

ダボシの村の小山に佇むリンガ寺は、小さいがチベット寺としては有名で、ダライ・ラマ5世も祈りに訪れた。700年以上の歴史があるが、文革の時に多くが破壊されたものを、地元の人々が修復。伝説では、チベットを経てここを旅したインドの僧の山羊が、この小山から動こうとしないのでこの地に寺を建てたという。

以来、旅のご加護、病の回復などが祈願される寺となり、人々が捧げた山羊や豚、鶏などの家畜が群れをなし、この小山を住処としている。シャングリラの町からは、22㎞ほどの山道を車で小一時間。地元はもちろん、シャングリラよりはるか遠い村から信心深い村人たちが通ってくる。

この寺の近くに2005年に開業したホテルが「バンヤンツリー・リンガー」。リンガ寺の小山に続く緩やかな丘陵地帯に32室のロッジが点在するリゾートホテルだが、周辺の風景にすっかり同化している。シンガポールを拠点に

するバンヤンツリーが地元チベット人事業家と開発したもので、地元の家屋を移築したものや、古い建材で建て直したものをメゾネット形式の客室に改造している。それぞれのロッジがかつての家屋の表札を掲げ、家畜を入れた一階部分は浴室に、上の階が寝室となっている。すべての客室に暖炉、手づくりの木製浴槽、バルコニーのあるゆったりとしたつくりだ。

「07年以前は欧米客が中心でしたが、いまでは7割以上が中国市場。カップルからファミリーの需要がふえ、平均滞在期間も4泊と長くなりました。クリスマス期もにぎわうため通年オープンしています。夏場の需要に応えて、16年には12室をさらに増築予定です。顧客の満足度を上げるとともに、バンヤンツリーのコンセプトを地元に広め、地元に貢献してゆくことも大きな課題です。現在65人の従業員のうち、6割が地元。開発が急速に進むシャングリラですが、郊外の村で生き続ける少数民族の文化を大切にしたい」と、チベット人総支配人のタシュ・ヤンゾム氏は語る。

高水準のスパで知られるバンヤンツリーは、現在世界に32軒のホテルを展開、シャングリラ市内では第二ブランドであるアンサナも運営している。

＊

リンガ寺で旅のご加護を祈って出発した5日間のキャラバンは、コンスタンチンの指揮のもと、参加者5人の総勢15人、馬27頭、無事にダボシの村に戻った。あいにく天気には恵まれず、体力的にもきついものがあり、4000mの峠は迂回し50kmほどの行程のキャラバンとなった。高山病の薬を飲み、酸素ボンベを携

http://www.banyantree.com

テラスからの展望を楽しむ

ゆったりくつろげるチベット風の内装の客室

山並みに同化しているバニヤンツリーの客室ヴィラ

タシュ・ヤンゾム氏

曼荼羅がはためくケルン。遠くに村を望む

photo:Odon Nalecz

連載
世界の先進的街づくり探訪
39
茶馬古道

えているものの上り坂には息が上がった。ぬかるみや川の一本橋、崖っぷちの道にも泣かされた。馬を率いるチベット人らは常に先に着き、テントと火を用意して待ってくれていた。

山間のテントから立ち上る煙を見つけるのが嬉しかった。夕焼けの山の峰を仰ぎながらの食前酒の燭台の蝋燭に照らされたテーブルで銀器やクリスタルで、ゆっくり食事を楽しむ。キャンプファイヤーを囲む食後酒のひととき。辺りを覆う濃密な山の夜。チベット絨毯とクッションで快適なテントのベッド。標高3500mの深い眠り。朝は標高が高すぎて鳥がいないため、しばしばヤクの鐘の音で起こされた。日本人と姿はよく似たチベット人は穏やかだが強靭で頼りになった。彼らにとっては散歩のような行程だったのだろう。

今夜はゆっくりバンヤンツリーで久しぶりのお風呂でくつろごう…小山の向こうのダボシの村を思いながら、最後の2kmを歩く足どりも軽い。と、村を望む丘の上で、石を積み上げた最後のケルン（道標）と出会った。風に翻る四色の曼荼羅に誘われて、チベット人を真似てその周りを時計回りに歩く。

チベット教ではケルンの周りを歩くのは経を唱えるのと同じ功徳があるという。ゆっくりと3周目を歩きながら、われわれのキャラバンもまた、山の神に捧げた歩みであったことに気づく。●